変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.37

故郷の再生に人々の営みは続く

岩手県・大船渡市大船渡駅周辺地区 土地区画整理事業・津波復興拠点整備事業

里中高志
Satonaka Takashi
illustration：Shigeyuki Sakata

被災地に時は流れ、人々の営みは続いていく。東日本大震災による津波で壊滅的な被害を受けた岩手県大船渡にも、5度目の春が訪れる。

まちには人が集まる場所が欠かせない。大船渡市の沿岸部に位置する5階建ての大船渡プラザホテルは、観光客の滞在の拠点としてだけではなく、地域住民の挙式や宴会、催し物で利用される地元のランドマーク的存在だった。

「2011年3月11日の大震災で、プラザホテルは津波の被害を受け、2階まで浸水しました。私もその日はお客様とホテルの屋上に避難し、5階の客室で夜を明かしました」

そう振り返るのは、プラザホテル支配人の今野廣己さんだ。ホテルの屋上からまちが濁流に呑み込まれる光景を見た日から4年がたったいま、屋上から見える風景には更地が広がり、静かな陽光がまちを照らす。

「復興のためには宿泊施設がなければならない、という弊社の社長の決断は早く、2011年の12月にはホテルを修復し、リニューアルオープンをいたしました」（今野さん）

ところが、新しい大船渡のまちを作る土地区画整理事業計画において、県道を建設する予定の場所にホテルは重なっていた。今野さんは言う。

「修復した後に事業計画が分かったのでしかたがありません。でも、移転先を新駅の目の前に確保することができ、いち早く再建することにいたしました。何より、ホテルが稼動すれば大船渡が発展すると願うばかりです」

新しいホテルを建設するにあたっての地鎮祭が今年の3月1日に行われた。2016年の2月に完成し、3月にはオープンする予定で、その後現在のホテルは取り壊される。プラザホテルにとっては、いわば5年の間に大規模な修復と建て替えを行う大事業。その敢行は、大船渡に人が集う拠点であり続けたいという願いに支えられている。

新しいまちづくりが始まる

大船渡駅周辺地区土地区画整理事業では、新しくできるJR大船渡線の線路と駅を中心に、沿岸部を商業地域、山側を居住地域とする。居住地域には2メートル以上の盛り土を施し、全体を嵩上げする大規模工事が進んでいる。そして、居住地域の嵩上げと沿岸部の商業用地や公園の整備にあたっては、海岸に近い場所に居住地を構えていた人に、山側の居住地域に移り住んでもらう仮換地が行われている。この計画全体を推進するUR都市機構の岩手震災復興支援本部・大船渡復興支援事務所の中川一郎所長はこう話す。

「海側の土地は市が買い取り、商業事業者に賃貸に出すことで、山側に移り住む人の新生活を支援します。600名ほどの地権者すべてにアポイントを取り、市の職員と一緒に可能な限り面談してひとりひとりの意向を聞き取っています」

結果として300名近くの地権者が事業の対象になった。仮換地後の海側の商業地にはプラザホテルのほか、ホームセンターやスーパー、商店街、飲食店のグループなどができる予定だ。

「震災前は各地に点在していた商店主の方々も、震災後に仮設商店街で一堂に集まったことで、同じ場所で店を開くことの魅力を実感しているようです。この流れを活かして各事業者さんとうまく連携していきたい。被災した方々の立場に寄り添って、スピード感を持ちながら全体のまちづくりをお手伝いしていきたいと思っています」（中川所長）

プラザホテル周辺は再開発に向けて着々と工事が進む

盛岡から大船渡に赴任し、いまは大船渡市民として復興に携わる中川所長。プレッシャーに押しつぶされそうになるが、目の前の仕事に追われ続けたことで逆に悩みすぎずにすんだと話す。それを補佐する三戸勇二課長も震災後の単身赴任だが、行政関係者の復興にかける使命感と郷土愛に胸を打たれ、この仕事に携われる喜びを感じているという。

「なかには、もう海は見たくないからもっと山側に移りたいという住民の方もいます。調整が難航することもありますが、ぎりぎりまでご提案して納得いただける形で進めたいと思っています」（三戸課長）

点から面へと広がる復興計画

大船渡市の戸田公明市長は、震災から5年目の「いま」をこう話す。

「大震災からの緊急対応、復旧、復興であっという間に過ぎた4年間でしたが、復旧事業のほぼすべてが着手状態になりました。津波復興拠点整備地域の第一号としてプラザホテルさんが着工したのは象徴的で、ホテルを中心に発展していくことに大きな期待を寄せています」

各事業者が切磋琢磨してお洒落なまちを作ってほしいと語る戸田市長。そして、震災からの復興を進める上で、URの力は大きかったと話す。

「600名ほどの地権者さんの意向をすべて勘案しながら仮換地の設計図面を作ってくれた。たいへんなノウハウを発揮していただきました。さまざまな方々のお力をお借りしながら復興を進めるなかで、URさんには最大クラスの力になっていただいています」

大船渡市災害復興局土地利用課の金野尚一課長補佐によれば、大船渡では他地区と比べてもまちの外に移らずに仮設店舗などで事業を再開した人が多かったという。

「子供のころの私にとって、大船渡は大きいまちだった。今の子供にも、同じように感じてもらいたい」と金野課長補佐は話す。

秋刀魚やカツオなどの海産物の水揚げ量も震災直前と同水準に回復した大船渡。プラザホテルでは震災で離ればなれになった人が同窓会で再開する姿も見られるようになった。「アメリカ大陸を発見したコロンブスがもともと目指していた黄金の国ジパングは、西磐井郡平泉の中尊寺金色堂のことだったのではないか」という説を踏まえて、気仙の産金に関わるモニュメントの設置を要望している。

「新しい大船渡がどんなまちになるか、いまから楽しみです」

と、プラザホテル支配人の今野さんは目を細めた。

震災を乗り越えたまちでは、ひとりひとりの個人事業主や地権者といった点が集まって動線を作り、それはやがて集約されて面となる。そうして出来上がった新しい場所は次の100年に向けて人々の息づく故郷となっていく。ひとりひとりの大船渡市民が、その主人公だ。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社